



小規模福祉作業センター「コーナス」にて(2009年10月)

「すべての人に未来があるし夢がある。みんなと一緒にいろんな夢を見ていきたい」。福祉作業センター「コーナス」(大阪市阿倍野区)の事務局長・白岩高子さんはその達観した眼差しで、穏やかに言葉をつむぐ。重い障害のある子を授かった親たちと共に四半世紀、一人ひとりの尊厳を重んじた“生きる場”を創造している。

ノーマライゼーションをめざして

閑静な住宅街に、ギャラリーのような洒落た町屋がある。開放された扉をくぐると、ポップなアート作品が目飛び込んでくる。ここコーナスに通う8人の通所者は、絵画や人形などを思い思いに制作している。中には、障害者アート公募展で最優秀賞に輝き注目される男性もいる。

1981年、同じ幼稚園に通う障害児の保護者が中心となって発足した「阿倍野で共に生きよう会」がコーナスの前身だ。子どもたちが放課後に行く場がないことから、「だったら自分たちでつくろう」とビルの一室に拠点を設けた。

「自分の娘を施設に預けるか、地域の子供たちと同じ学校に通わせるか」の分かれ道で、後者を選択してのことだ。その道は皆で力を合わせて切りひらいていかなければならない。「娘のおかげで生きる道が決まった」と、保育士の仕事と平行して作業所の運営などに取り組んできた。

地域に根ざして

日本に支援費制度が導入されたのは2003年。06年には障害者自立支援法が施行され、現在はすべての人を包み込み支え合う社会をめざす「ソーシャルインクルージョン」の時代を迎えている。コーナスもいち早くこの理念のもとで地域に根ざした拠点づくりに取り掛かった。

「人と人との関係をつくりやすく、晩ご飯の

匂いが香ってくるぐらいの程よい距離感がいい」と、05年に現在の場所に引っ越し町屋を改装。1階に作業所、2階に地域住民らに開放する交流スペース「NAKA」を設けた。「皆さんの浄財でできた施設。ここからいろんな情報を発信し、まちづくりに貢献したい」とセミナーや上映会などを行っている。

コーナスが福祉作業所であることを知らずに来る人もおり、「NAKAのおかげでコーナスのことも知ってもらえ、彼らの活動に親しみを持ってもらえる」と思わぬ効果に喜ぶ。地域住民との共生が確実に現実のものとなっている。

アート活動で広がる夢

通所者の主な活動は地域の清掃活動、一流シェフのお墨付きレシピで焼くクッキーづくり、アート作品の制作だ。アート活動は「何か夢のある活動を」という思いで、5年程前から取り入れた。「それぞれが興味を持ったことに没頭し始めた。いろんな物を壊してばかりだった人の“破壊のエネルギー”が“創造のエネルギー”に変わっていった」

その様子を見て、はっと気がついた。「みんな中に持ってはるんや。そんなわけはないと決め付けて可能性をストップさせていたのではないかと。彼らが創造する作品を見て、「こんなに豊かな世界が広がっていたなんて」と驚き、「すべての人に未来があるし夢があるんだ」と確信した。

「彼らの活動を多くの人に知ってほしい」と展覧会の開催や作品の販売にも積極的に取り組んでいる。とは言っても、「突然制作をやめてしまってもいい」と執着はない。「だって彼らは生身の人間。次に何に関心を持つかわからない。何かに向かって一緒に夢を見ていけたらいいな」。その瞳は限りなく優しい。

(文・江中咲紀 / 写真・高島悠介)

CLOSE
クローズアップ
UP

障害者とともに 夢のある活動を

プロフィール

NPO法人「コーナス」事務局長

しら いわ たか こ
白岩 高子さん



大阪生まれ。1981年に障害のある子どもの保護者ら、同じ境遇に立つ仲間と「阿倍野で共に生きよう会」を発足。1992年に小規模福祉作業所「コーナス共生作業所」とし、2005年からは「小規模福祉作業センターコーナス」として定員10人のアットホームなセンターを運営。また、2001年にケアホーム「ペイトコーナス」を開設。クッキーの予約、交流スペース「NAKA」のお問い合わせなどは6659-9312まで。